

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	13
瑪瑙集	26
紅玉集	28
俳誌交歓	29
9月号月評	30
恵贈句集拝見(37)	32
恵贈俳誌拝見(9)	34
他誌転載	36
特別作品「コモ湖・ドロミテ・チロルの旅」	38
琥珀集作品鑑賞	40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	41
Ⅱ	42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	43
ひこばえ通信(12)	45
イタリア俳句・紀行文(1)	46
妣の国父の蒼天(30)	48
志摩一泊吟行記(1)	50

今月の一句

一泊の荷重りは詩書藤袴

桂樟蹊子

(昭和五十一年作)

霜林俳句会の一泊吟行に行かれた時の作品である。当時は電子辞書一つあれば済む時代ではない。「鞆の中の季語集や俳句雑誌などが、少し重かったけども、藤袴の咲いている湖畔の宿は楽しかった」とある。その五年後に師との出逢いがあり旅には必ずお供をしたものである。旅は句会とちがって緊張がほぐれ師の違った面に会える楽しみがある。このたびの志摩の吟行も暑かったが楽しい旅であった。

隆子

志摩の旅（一）

塩路隆子

隆々と樟の神木夏千鳥（伊雑宮神社）

夏落葉舞ふ神苑の車井戸

群青のこれぞ黒潮小鯨刺

水軍の砦灼けをり潮の香

大南風の岩頭白き波しぶく

口明しままや溽暑の休み木偶

黴の香を閉ざして木偶の衣装蔵

夏の海胆を割る海女荒き志摩言葉

聳えたる松の涼意に抱かる（おりきの松）

風待ちの島へ誘ふ海紅豆

九月号光耀抄

塩路 隆子選

ほんたうの空ありました志摩の夏
尾の切れし蜥蜴敏捷瓦礫より
水に棲み水中知らずあめんぼう
蛍火のひとつに闇の動きけり
緑蔭にハナハトマメマス三姉妹
この辺りの米食べてをり青田風
水神が自慢のひとつ村涼し
幽冥の世界をしぼし螢舞ひ
雲の峰見下ろしたくて観覧車
湯ほてりの肌に程よき葭實風
合歓咲けり尖り屋根のプチホテル
四葩雨観音菩薩涙して
五百羅漢声なき声を炎天に
ゆくりなきコスモスの影男子寮
素潜りの一番のりは河童賞
合戦の陣のごとくに菖蒲園
卑弥呼世の銅鏡くもる溽暑かな

森下 康子
北尾 章郎
新実 貞子
塩路 五郎
宮崎左智子
竹内 悦子
坂上 香菜
小林 成子
鈴木 照子
藤見佳楠子
田下 宮子
山口キミコ
岡 佳代子
小澤 菜美
松岡 和子
片岡久美子
中村ふく子

無粹なる南部風鈴音色澄む
 切子褒め江戸の話の声はづむ
 気味悪き目をなほ更に守宮来る
 四囲玻璃に素早きターン熱帯魚
 漏刻の祭太鼓の律儀かな
 涼風のナイトクルーズくさり橋
 哲学の道や今宵は恋螢
 川開き鶺も本番と猛りけり
 五位鷺の声けたたまし宮の杜
 にび色の夏の浜名湖素通りす
 梅雨曇糊を堅めに夫のシャツ
 湯上りの胸元緩し夏の月
 開け放つ蔵や土用の息吐かせ
 鶺飼絵の懐かしきかな水うち
 血管の透けたるトマト選びけり
 鬼灯市鉢を片手にいなせな娘
 沼にふと五位鷺一羽動かざる
 梅雨晴間草刈の音暴れ出す
 止まりては首立て直す羽抜鶏
 四方より風をとり込み夏の寺

伊藤 純子
 川崎 利子
 増田 一代
 宮田 香
 中川 すみ子
 長濱 順子
 坂根 宏子
 難波 篤直
 桂 敦子
 大松 一枝
 栗倉 昌子
 小林 久子
 小西 和子
 山崎 里美
 吉田 希望
 西田 史郎
 高谷 栄一
 谷口 俊郎
 阪本 哲弘
 佐用 圭子

芍薬のくづるる時は色を変へ
 掛け水に一息入れる釣忍
 水打ちて極楽の風頬撫づる
 一杓に身の錆洗ふ梅雨の寺
 節電の待合室の扇かな
 瘦身にさらに追ひ討ち酷暑かな
 ひまほりを亡夫の化身のエールとし
 結局は断捨離出来ぬ更衣
 奇岩背の大聖堂や薄暑光
 恋もやう光神秘に蛩舞ひ
 耳遠の夫を励まし梅雨の明け
 朝風に真珠筏の浮標光る
 二歳児の燥ぐお下がり浴衣かな
 初蟬の九十デシベル応援歌
 睡蓮の池を見つめてモネごこち
 堰に立つ鹿の風格夏の暁
 夏野菜のヘルシーピザや山の風
 炎昼や人影もなき街の黙
 喚声や泳ぎ得意の赤銅子
 父の日の父の明るき博多弁

杉本 綾
 笠井 清佑
 紀川 和子
 伊東 和子
 和田森 早苗
 和田 郁子
 和田 晴子
 吉田 美代子
 三川 順子
 西垣 美千子
 飯田 美千子
 井口 淳子
 石川 孝夫
 山本 孝夫
 吉波 喜久恵
 横田 矩子
 前川 ユキ子
 松田 和子
 松田 洋子
 秦 和子
 藤本 秀機

パジャマの子トマト熟れしを丸かぶり
托卵の呵責に啼けり時鳥
万緑に包まれてゐてふと淋し
乾パンの素朴な味よ濃あぢさゐ
妣の帯しめていそいそ夏芝居
親も子も楽しむ西瓜種とばし
ノンアルクールビールも宜し油照
僧兵の眼力の先竹伐会
観音に初の目見えや清和なる
猛暑日に右肩下り体重表
蓮の花咲きて一村浄化され
百幅の五百羅漢 夏の寺
梅雨寒のわらべ地蔵や苔衣
瀬音聞く耳 観音や濃紫陽花
車窓より触るる青草ローカル線
看護師のきりりと涼し白帽子
夏風邪のよくなるまでは無口なり
身を護るに精いっぱいこの暑さ
やや派手目大いに派手目宿浴衣

中井登喜子
中本 吉信
能勢 栄子
田中 浅子
辻 香秀
寺田 光香
土井久美子
笹井 康夫
清水侑久子
鷺見たえ子
上甫木伊都子
木戸 宏子
五十嵐 勉
池田加寿子
伊庭 玲子
宇治 重郎
常田 創
三原 利枝
山田 愛子

琥珀集

地震の地

北尾 章郎

柏餅児の食欲に癒さるる
攫はれしみ霊戻らぬ青葉潮
身を賭して避難誘導蛍の火
空蟬や形見に適ふ品探し
尾の切れし蜥蜴敏捷瓦礫より
純白の四葩へエール濁世かな
大地震の話は尽きず梅雨の宿

ペコちゃん

森下 康子

昼寝覚の頬にくつきり指輪痕
ベランダに撫で肩二つ星の夜
感情線息切れしたり極暑なる
炎天のペコちゃん人形話好き
朝市にべっぴんさんのトマト買ふ
香水の匂ひまきつつ熟女行く
ほんたうの空ありました志摩の夏

あめんぼう

新実 貞子

五月雨を集めし川に鷺一羽
草蔭にルビー一粒蛇毎
雨雲を射るかに咲けり立葵
水に棲み水中知らずあめんぼう
暮れなつむ一隅仄と花十葉
梵鐘に応ふる声や牛蛙
恥ぢるかにくれなぬ差せり青楓

螢火

塩路 五郎

青田風

竹内 悦子

過疎すすむ故郷の村雲の峰
螢火のひとつに闇の動きけり
螢の無言の闇をただよひぬ
遠き日や醤油の黴と婆さまと
風抜ける京の町家の夏座敷
猿沢の池に亀の子影の濃き
黴の香の皮パスポート小抽出

三姉妹

宮崎左智子

奥吉野

坂上 香菜

緑蔭にハナハトマメマス三姉妹
梅雨明けを暇な雀がふれ廻る
身をよぢる蚯蚓哀れや石畳
骨密度ほめられてゐる日の盛り
大夕焼母子の影を揺らせつつ
君ほどの秘めたる恋や落し文
だれかれと愛想良き児の甚平かな

この辺りの米食べてをり青田風
神経痛の辛さ忘れし心太
汗掻きの女離さずコンパクト
反転せしグラスの水読書の夜
隠居など死語になるやも合歡の花
今もある丁稚羊羹竹の皮
雨の夜をひそと熟れゆく枇杷あまた

風通ふ弥山みせんふもとの蝉時雨（天河弁財天社）
水神が自慢のひとつ村涼し（黒滝村）
老鶯を天武帝みかどの声と聞き（丹生川上神社下社）
十薬や大峰山の登口
初ひぐらし「女人結界」しるべ内
結界より山上ヶ岳雲の峰
万緑の包むロマンの南朝址

蓮浄土

小林 成子

葭簣風

藤見佳楠子

桂花咲く杜深閑と鑑真忌

蓮開く音待つ湖畔白じらと

蓮浄土を亡夫も見給へ湖畔宿

紫陽花の万花に在す九体仏

幽冥の世界をしばし蛩舞ひ

夏夕べ信貴山絵巻繙きて

蛩舞ひ解脱世界の信貴の森

かもめ気分

鈴木 照子

カサブランカ

田下 宮子

雲の峰見下したくて観覧車

ジェットコースターかもめ気分の南風岬

どくだみの裏径が好き下校の子

蒲の穂や探検好きの一年生

みちのくの海戻り来よ濃紫陽花

掌の汗も金色光堂

団扇美人ファッション街の夕そぞろ

佇めば宇治の早瀬の音涼し

茶箱積む軒の深きに夏燕

省エネの日除けのゴーヤ花盛り

湯ほてりの肌に程よき葭簣風

先付は切子小鉢の湯引き鱧

ほろ酔へばつひ国訛り地ビールに

再会を約す駅頭遠花火

カサブランカ咲いて庭内豪華にす

合歓咲けり尖り屋根のプチホテル

ベビーカーを緑蔭に停め子守唄

常夏や極楽鳥の放し飼ひ

苦瓜の蔓奔放に延びてゆく

水打ちて暖簾をかける蕎麦老舗

駄菓子屋で七夕セット買ふ母子

七変化

山口キミコ

男子寮

小澤 菜美

紫陽花のツアー一団みなをんな

四葩雨観音菩薩涙して

茂る中にはか庭師の大ばさみ

雨雫受けて生気の七変化

がうがうと作る綿菓子夏祭

当てもん屋に群がる童祭の日

梅雨晴間ゲートボールの賑へる

酷暑

岡 佳代子

余り風

松岡 和子

生駒嶺に白き雲浮き更衣

捨てられぬ煩惱炎ゆる酷暑かな

ゆるやかな余生の歩み夏衣

あとがきを先に読みけり青簾

五百羅漢声なき声を炎天に

酒蔵は大正の香や夏燕

池の面に山映ゆるなり夏来る

秋草と読めて涼しや墨書展

万緑の黙ゴンドラをふつと吐き

噴水と風の饒舌バルコニー

黄の蕊はニンフの睫毛末央柳

洋菓子のキャラメルの焦げ夜の秋

ゆくりなきコスモスの影男子寮

藤椅子にリモコン備へ生きる智恵

素潜りの一番のりは河童賞

どこへでも行きたがり屋の夏帽子

麦秋を通園バスの「くちら号」

其処此処に「蝮出てます」回覧板

麦刈りて大地の起伏あらはなり

峪わたり来る夕立の余り風

炎天下贖罪のごと畠を打つ

楽太鼓

片岡久美子

埴輪

中村ふく子

山麓の風穴に咲き青い芥子（皿ヶ嶺）

神苑の風立つ茂りひた歩く

楽太鼓ひびく神苑青葉風

舞楽面はづす少女の汗しとど

塚原を風の間はまに梅雨の蝶

合戦の陣のごとくに菖蒲園

若竹のはや抜きん出て風送る

夏の蝶

伊藤 純子

明易し

川崎 利子

八橋の風はむらさき菖蒲園

無粋なる南部風鈴音色澄む

夏の蝶風の意のまま漂へり

下駄鳴らし祭囃子を追うてゆく

今年また初蝉を聞き恙なし

病歴を辿る自分史梅雨灯し

夫と観るモノクロ洋画梅雨の夕

向き向きに聴き耳立ててアマリリス

黒南風に一瞬紙は刃にも

埴輪の眼妖しや梅雨の溜溜めて

卑弥呼世の銅鏡くもる薄暑かな

裏六甲やつぎ早なるほととぎす

塔頭に散る夏椿無音なる

竹婦人抱きて安堵のエコ生活

涼風や忙しきひと日の湯上りに

席に着く茶花の楚楚と夏点前

切子褒め江戸の話の声はづむ

暑氣中りやる気なきまま花活ける

かはほりや茶髪少年屯せる

溪谷に群るる山百合風甘き

あっぱれななでしこジャパン明易し

空晴れて

増田 一代

濁り鮒

中川すみ子

ゼラニウム強き日差しになほ赤き

葉桜や墓地の坂道空晴れて

気味悪き目をなほ更に守宮来る

万蕾の落ちて適當柿の花

若者に人気沸騰桜桃忌

くちなしを生垣にせし家香る

もくもくと家路へ急ぐ暑さかな

熱帯魚

宮田

香

中欧の旅

長濱 順子

四囲玻璃に素早きターン熱帯魚

黒南風や魔力をいまに羅生門

単衣着て背筋真つ直ぐオペラ観る

流水のあてなき旅や梅雨出水

ビル繋ぐ都会の朝の虹眩し

六月の重き夜気裂く汽笛の音

咲き初むる山樞子に胸乱さるる

もんどりを仕かけし雨後の濁り鮒

一斉の県下清掃合歓の花

エコの世や涼風の筋探し当て

待ち合はずメール確かめ夏館

漏刻の祭太鼓の律儀かな

あだ生えの葎の花咲く植木鉢

背伸びして覗く日時計漏刻祭

涼風のナイトクルーズくさり橋（ハンガリー二句）

風薫るドナウ河畔の白き塔

軽やかな蹄の音や夏並木（オーストリア二句）

青芝にト音記号のくつきりと

赤瓦と塔の林立夏きざし（チェコスロバキア三句）

欄干に並ぶ聖像白夜かな

アーチ潜る石畳路地青葉風

恋 螢

坂根宏子

かすみ草

桂

敦子

梅雨出水線路にひたと川迫り

やませ吹く夜通し荒き浪の音

夏の夜の笛澄み渡り薪能

幽閉の茅葺き旧居夏の蝶（岩倉具視）

磐座の鄙びし社木下闇

哲学の道や今宵は恋螢

叢を離れ螢の仄明り

川開き

難波 篤直

黒南風

大松一枝

公園のクローズ続く梅雨出水

夕風に翼拡げる川鶉かな

水無月や独身会の菓子作り

父の日を子は忘れずに宅急便

受付に四葩一輪和みけり

川開き鶉も本番と猛りけり

御旅所に並ぶ提燈県祭

節電を唱へオーブンビアガーデン

珈琲店にピンク濃淡薔薇アーチ

裾さばき佳き学僧や風薫り

餌を待つ子燕口の裂けるかに

五位鷺の声けたたまし宮の杜

あじさぬや日替りランチ注文し

花東の名脇役よかすみ草

にび色の夏の浜名湖素通りす

雲隠る夏の富士山惜しみけり

納骨の読経僧侶の汗垂るる

水無月の水をたつぷり手向け花

黒南風や一期一会の墓地に佇ち

たそがれの国道たばしる俄梅雨^{あめ}

早川の瀬に白波の夕涼し

九月号月評

塩路 隆子

ほんたうの空ありました志摩の夏 森下 康子

一泊吟行の二日目の句に最高点をとられた感性のいい作者の俳句である。気取らず素直な気持ちで、話言葉でうまくまとめられた。真夏の太陽が照りつける下での、真つ青な空と群青色の海とが織りなす自然の調和を、作者は「本物」と思われたに違いない。丹波生まれの筆者にはもうたまらない志摩の旅であり、真つ先に目に飛び込んだ一句であった。

尾の切れし蜥蜴敏捷瓦礫より 北尾 章郎

震災地を訪れた作者の一連の中の一句である。作者の目に先ず飛び込んだのは、瓦礫の中から出てきた尾の切れた蜥蜴である。啓蟄を過ぎた三月十一日の震災を潜り抜け、命をつないだ蜥蜴の姿は尾が切れていたと言う。「敏捷」という措辞の通り、それゆえに命を得た一匹の生物に作者の目は暖かい。着眼の良さが詠み人の胸を打つ句である。

水に棲み水中知らずあめんぼう 新実 貞子

歳時記の中で愛用しているのもう三十年にもなる講談社の「カラー図説日本歳時記」である。どうも納得がいかないのがこの「あめんぼう」と「みずすまし」の区別が判然としないことである。この句は筆者なりの見解で解説をしたい。水の上を長い三対の脚ですいすいと泳ぎまわっているのがあめんぼう。何時も水面を撫でるように泳いでいるあめんぼうは、水に棲みながら水中を知らないと作者は感じられた。水面を軽々と泳ぐアメンボウにも悩みはあるものなのか、面白い発想である。

螢火のひとつに闇の動きけり 塩路 五郎

丹波の螢の記憶は鮮やかに残っている。村の中央に流れる川の土手の向こうがぼーっと明るくなるほどの沢山の螢が飛んでいた。闇が動き出す記憶は室生の螢を見に行つた時の記憶であろう。一匹の螢が近づいて来た印象を「闇が動く」と捉えられた感性がすばらしいと思う。大切にしていただきたい一句である。

(以下略)

(以下略)